

担当教員の研究

地域社会の固有性を理解する

私の専門は、都市社会学、観光社会学ですので、その立場から、①地域社会の固有性、②地域社会にとっての観光の二つをテーマに研究を進めてきました。

町の個性は、町並み、街路などのハード、人々の日常生活やお祭り、地域活動、まちづくりなどのソフトの両面から生み出されています。私はこれらと共にある人々の営みや想いに惹かれ、それぞれについての社会学的な研究を目指すようになりました。

対象領域も広いので未だ研究途上ですが、幸い、魅力的な個性を有する町に出会うことができました。それが、東京都の「谷中・根津・千駄木」地区と、群馬県の桐生市です。私は両地域にお世話になりながら、町並みの保存・活用の実態、祭礼行事、まちづくりの取り組み、生活史などに関する事例研究を進めてきました。このような研究を積み重ね、地域社会の固有性について様々な観点から考察し、理解することが第一の課題です。

地域社会にとっての観光というテーマ

これからの地域社会を考える上で、観光というのは重要な方向性の一つですので、現在の観光現象を正しく理解することは欠かせません。ただし、どのような観光形態が当該地域に適合的なのか、そもそも観光

が最適なのかどうか、ということはその地域社会のあり様を踏まえて考えていく必要があります。そのためには、まずは地域社会の固有性の理解が求められるのです。

観光現象は多様な側面を含んでいますが、その中でも特に、近年の新たな観光行動の発生に興味を持っています。地域社会にとっての観光を考える上で、大規模な投資が必要な観光形態はあまり現実的ではありません。むしろ、小規模であっても、その地域にしかない独自の歴史や文化、町並みなどを経験、消費することを望むような新たな観光潮流に、今後の可能性の芽があると思います。そのため、このような新たな観光潮流の特性の解明を第二の課題として研究を進めています。



教員の情報	
職位	准教授
専門分野	地域社会学、観光社会学
担当科目	社会調査(質的調査) 観光社会学、都市社会学 演習

近年、台湾の都市や歴史の研究を始め、ちよくちよく渡台しています。行く度に新たな発見があります。皆さんもぜひ台湾に目を向けてみてください。

ゼミの活動内容

ゼミでは私自身の研究対象地でもある群馬県桐生市、「谷根千」地区を主なフィールドとして、様々な地域活動、行事にも参加させて頂きながら、調査研究を進めてきました。

学生には、調査だけでなく、可能な限り現場でのお手伝いや地域イベントの企画などに取り組んでもらいたいと思っています。多様な人々と接することは、社会性を身につけるきっかけになります。また、文献の知識を現場にぶつけてみれば、新たな問いも生まれま

す。さらに、現場の方々のパワーにも直接触れてもらいたいです。

ゼミではこのような地域での活動を基礎に、関連する領域の知見を文献で学びつつ、現場での活動に従事し、その経験を持ち帰り、改めて関連領域、現場についての議論を深めていくという作業を行っていきま



石井清輝研究室

書棚からこの一冊

藤田弘夫(1993)
『都市の論理—権力はなぜ都市を必要とするか—』
中公新書

権力論という観点から古今東西の都市を縦横無尽に論じていく本で、都市に関する様々な知識が得られるだけでなく、読んで行くと、世界各地の都市の時間旅行に行っているような不思議な気分になります。

担当教員の研究

観光まちづくりにおける
リーダーシップ

私の専門である「観光学」は観光に関する現象をさまざまなアプローチによって捉える学際的学問で、私がおもに用いるアプローチは経営学や心理学です。これらのアプローチを用いて近年は「観光まちづくりにおけるリーダーの発達及びリーダーシップ」について研究してきました。

日本では最近、観光まちづくりがさまざまな地域で進められていきます。このまちづくりには必ずと言って良いほど、リーダーの存在があります。彼らはどのように観光まちづくりのリーダーとなったのか、彼らが発揮するリーダーシップとはどのようなものか、それはどのような成果をあげるのか、にとても興味があります。これまではリーダーの視点から研究を進めてきましたが、今後はフォロワー、すなわちリーダーシップの影響を受ける人々の視点から「観光まちづくりにおけるリーダーシップ」を研究していきます。また、リーダー以外が発揮するリーダーシップについても研究していきたいと考えています。

研究する上で
大切にしていること

私は「その研究の社会的意義は何か」ということを大切にしています。研究という行為自体に、「探求」という面白さがあります。しかしそ

れだけにとどまらず、社会的意義という観点を大切にして研究を進め、その成果を少しでもまとめることができる、社会への貢献という形で研究の意味をより拡大させることができます。

一方で、「現場ですぐに活用可能かどうか」という観点のみで研究価値を判断しないようにすることも心がけています。すぐに実践に役立てられるかということのみを追い求めてしまうと、問題の根本を熟慮せずに実践を促してしまう可能性があります。それでは結局その問題を根本的には解決できず、より良い状態、観光まちづくりで言えば「住んでよし、訪れてよし」を実現できないかもしれません。

研究の先にとどのような意味を社会にもたらすことができるのか、を大切にしながらも、拙速に結論を出してしまわないよう地道に研究へ取り組みたいと思います。



石黒圭(2012)

『この1冊できちんと書ける！
論文・レポートの基本』

日本実業出版社

ゼミナールの指定テキストです。私たちのゼミナールでは、2年生の時にこちらを輪読し、論文を書く準備としています。第1部が「論文の構成」、第2部が「論文の表現」になっており、おさえておきたい論文の作法がわかりやすく網羅されています。

単純なことは複雑に、
複雑なことは単純に



教員の情報	
職 位	准教授
専門分野	観光学、政策学、観光まちづくり リーダー発達論、リーダーシップ論
担当科目	観光まちづくり論、観光産業論、観光地域調査演習 演習

ゼミの活動内容

ゼミナールでは、観光まちづくり
に科学的かつ実践的にアプローチ
し、論理的思考力や問題解決力、ひ
いては「自ら考えて行動する力」を
高めます。進行は、テキスト輪読や
討論個人/グループでの研究発表
を基本とします。各学年での学びの
概要は以下の通りです。

- ① 2年次後期…3年次以降の演習
に必要とされる基礎的なスキル
を習得します。具体的には、論文・
レポートの書き方とビジネスマ
ナーの習得に取り組みます。
- ② 3年次…習得してきたスキルを
土台に、前期は専門書/論文の
輪読やグループ研究の計画立案
です。夏休みにグループ研究の一
環として地域調査を行い、後期
の前半にその結果をまとめて報
告書に仕上げます。後期の後半
は、各自で研究テーマを検討し、
卒業論文の研究計画書を作成し
ます。
- ③ 4年次…前期は、各自の研究計
画に基づき、データ収集のため
の調査計画を立案します。そし
て、夏休み前後に各自で調査を
実施します。後期は、データ分析
及び研究進捗報告・討論を繰り
返し、卒業論文を完成させます。
卒業論文執筆を通して大学での
学びをブラッシュアップし、卒業
後の活躍につなげます。

担当教員の研究

道の駅の採算性と
効率性に関する研究

私の専門の研究領域は交通政策論・公益企業論であり、主に大きく3つのテーマを中心に研究しています。1つは道の駅の採算性と効率性に関する研究です。現在、全国には1193件に上る道の駅が全国に設置されており、道路交通情報の提供はもちろん、観光、防災、教育、医療など地域のあらゆるニーズを支える拠点として大きな役割を果たしています。しかし、近年は施設の老朽化に伴う修繕維持費の高騰や駅間競争により業績が伸び悩む駅もあり、運営の見通しが立たず廃止に至った駅も存在します。道の駅の維持にあたっては公共性と効率性の両立が求められますが、これを実現するためにはどのような施策が望ましいのかについて定量的・定性的な調査をもとに分析を行っています。

条件不利地域の公共交通と
交通インフラの非経済的便益
の評価に関する研究

2つ目は、条件不利地域の公共交通とそれを支える空港、港湾、駅などの交通インフラをめぐる非経済的便益とその価値構成の評価に関する研究です。周知のように少子高齢化の進展に伴い、過疎地域や離島をはじめとする条件不利地域の公共交通の経営は厳しさを増しております。しかし、これらの交通は不

地域の物流において不可欠な存在であり、これらの存在により通常の市場取引では顕在化しない非市場的な便益が発生します。ここでは沖繩離島の航空輸送を対象にこうした非市場的な価値を定量的に計測し、利用者や住民が航空輸送に抱く価値とその背後にある意識構造を定量的に解明することを目的に研究を行っています。

公共交通の住民参加と
ソーシャルキャピタルの
関係をめぐる研究

最後は、公共交通の住民参加とソーシャルキャピタルの関係に関する研究です。先に述べましたように条件不利地域の公共交通は苦しい経営を余儀なくされていますが、そのような地域の一部では住民が公共交通の企画・運営に参加する住民参加型の公共交通の運行が開始されています。一方このような住民の取り組みの原動力になるものとは何か。ここではソーシャルキャピタルの存在に焦点をあて、ソーシャルキャピタルの醸成が公共交通の住民参加に結びつくの否かについて理論的・実証的に明らかにすることを目的に研究を行っています。

学生生活は一生に一度です。
色々経験して

沢山学んでください。

教員の情報	
職 位	准教授
専門分野	交通政策論、公益企業論
担当科目	交通政策論、観光交通論 流通経済論、演習

ゼミの活動内容

ゼミナールでは、主に交通分野を研究領域とし、フィールドワーク、基本文献の整理、調査分析など様々な作業を通して、ゼミ生1人1人が自分自身で調査研究できる力を養成することを目標に活動を行います。はじめに、2年次基礎演習ではゼミ生の関心に応じて3〜4つ程度のグループを作り、グループ研究のテーマを決め、そのテーマに沿ったフィールドワーク先を決定してもらいます。そして、フィールドワークを行うための準備として文献整理や調査先の下調べを行ってもらい、冬季休業期間中にグループでフィールドワークを行ってもらいます。3年次から冬に開催される各種ゼミナール

大会や懸賞論文の応募に向け、論文の執筆や報告資料の作成を行います。それ以降は卒論の執筆準備に取り掛かります。
ゼミは学生の自主性を尊重し、「全力で勉強し、全力で遊ぶ」をモットーに明るく活発なゼミにしたいと考えています。また、他大学との交流や関連施設の見学、ゲストスピーカーの講義も企画し、これらを通して様々な見識を身に付けて頂きたいと思っています。交通分野例えばLCC、空港、クルーズ船、港湾、高速ツアーバスなどに興味を持つ学生はもちろん、観光関連産業や地域活性化などの分野に関心がある学生、これから勉強したいと思っ



就職活動体験報告会(2020年度)



伊藤羊一(2018)
『1分で話せ：
世界のトップが絶賛した
大事なことだけシンプル
に伝える技術』

SBクリエイティブ

プレゼンや面接等で自分の話を相手に簡潔に分かりやすく伝えるための考え方や方法がわかりやすく書かれています。とくに就活前の学生には必読です。



夏季企業研修
(ANA羽田整備工場:2019年度)



担当教員の研究

私が取り組む研究は、これまで一貫して農業・農村における営農活動と、そこから派生する教育・福祉的活動、地域振興活動などに焦点をあて、各地の調査を行ってきました。以下では、近年の主な研究テーマについて紹介します。

世界／日本農業遺産登録を通じた地域農業経営

2000年代以降、世界／日本農業遺産（FAO／農林水産省）、重要な文化的景観（文化庁）など、農村景観、農村文化、農業技術を後世に残す保護制度が誕生しています。地域農業の担い手が早晩不在となるなかで、これらの制度を活用して国土保全とともに農業・農村の歴史的・文化的価値を活用した地域観光を行うこととともに、持続的な地域農業システムの再編が求められています。

現在取り組む研究では、世界／日本農業遺産等の国内認定地域を対象に、持続的な地域農業マネジメントシステムの形成要因の解明を行い、農業経営と「農業遺産」保全が両立した地域農業のあり方を提示することを目的に、各地の現地調査を実施しています。とくに世界農業遺産申請時の「行動計画」において策定される農業者および自治体や関係団体等による「農業遺産保全と持続的営農のための組織化」の実態に着目し、持続的な地域農業マネジメントシステムの形成に求められる理論構築を試みています。

学校給食における地産地消と食育

学校給食での食材供給は戦後整備されましたが、大規模調理場の建設や、大口の食材供給経路の形成により、地域で農業生産が行われているにも関わらず、その利用が乏しい状況がありました。各地域の実践や政策進展により、現在は47都道府県、いずれの学校給食においても程度の違いはありますが、地場産農産物が導入されています。そして食材としてだけでなく、生産者らによる食育も含めて教育素材としても活用する状況がみられています。

一方で、現在では教育政策、農業政策の一環で展開されている学校給食における地産地消ですが、その安定的な生産や供給体制、いかに教育活用できるかなど課題が残っています。学校給食の今昔の状況を踏まえながら、その推移や今後の展望を研究しています。

理想を高く持ち、実現するための学びと行動ができる大学生活にしてください！

ゼミの活動内容



片岡美喜研究室

本ゼミでは、農業・農村など地域資源を生かした観光振興に関する学習・研究を行っています。

演習Iでは、単に輪読を行うのではなく、事前に各自が予習を行ったうえで、定められた課程に従ってディスカッションを行う協同学習の手法である「LTD学習法」を実施しています。この方法は、専門文献の講読を行う際に、予習をもとにしたディスカッションをしながら積極的に学び、理解度を高めるものとなっています。

3年生のグループ研究では、現地調査を実施し、他大学との交流ゼミ合宿を行います。研究成果は、全国エコツーリズム学生シンポジウムや群馬県庁など、学外での発表機会があります。

演習IIでは、卒業論文に関する研究と論文執筆を行います。地域観光・農業・環境・食など、各自の課題意識に基づいたテーマをもとにした調査・研究をしています。研究テーマに関しては、ゼミ生の意志に基づき選定をさせ、課題意識を醸成したうえで、文献調査のみならず、現地調査の実施による研究を重視しています。

教員の情報	
職位	教授
専門分野	農業経営学 農業・農村における観光・交流活動による地域振興
担当科目	観光資源論 地産地消・スローフード論 エコツーリズム論 エコツーリズム・グリーンツーリズム特論

竹内和彦(2013年)
『世界農業遺産 — 注目される日本の里地里山』
祥伝社新書

世界農業遺産制度が分かりやすく解説されており、各地の事例紹介も含めて理解しやすい書籍となっています。農業・農山村の価値とはなにか、それらを保全するための制度および地域営農システムのあり方とはなにかを知ることができます。

担当教員の研究

多文化共生社会をめざして

現在、日本には二八〇万人以上の外国籍の人が暮らしており、日常生活のなかで外国人と接することも増えてきました。少子高齢化による労働人口の減少や世界的な留学生獲得競争のもと、日本における外国人住民は今後ますます増加していくことが予想されます。

自分が生まれ育った文化から離れて、まったく違う言語が使われている国で生活することは大変な苦勞が伴いますが、私たちのまわりには外国人は、必ずしも教室で日本語を教えてもらえる人ばかりではありません。経済的な理由や仕事の都合など様々な事情から日本語を学びたくても学べない人がいます。そのような人たちが、言葉ができれば何もできないと諦めることなく、自分のやりたいことにチャレンジしながら安心して生活していくためには、わからないことがあっても気軽に助けを求められる環境や、悩みを聞いてくれる身近な日本人の存在が欠かせません。言語や文



教員の情報	
職位	准教授
専門分野	日本語教育学 留学生教育
担当科目	大学生活のための日本語 専門聴解、ビジネス日本語Ⅰ 多文化共生論 異文化コミュニケーション

化の違いに関わらず、誰もが安心して暮らせる社会を築いていくためには、私たち一人一人が自分ができることを考え、外国籍の人たちを「住民」として受け入れていくための環境づくりが必要なのです。

外国人とのコミュニケーション

私は、外国人と日本人が交わる接触面のコミュニケーションを分析し、そこで見られる問題や日本人の言語行動、日本語会話の特徴について研究しています。

外国人とのコミュニケーションを成功させるためには、私たちが普段どのような人とかわかっているのか振り返り、日本語を母語としていない人の視点に立って客観的に日本語を捉えることが重要です。外国人にとってわかりやすい日本語とはどのようなものか、外国人とのコミュニケーションを通して我々日本人も学んでいく必要があるのです。

自分にできることを考えよう！

学生と接するにあたって

私の専門は日本語教育学で、留学生対象の日本語科目のほか、「多文化共生論」や「異文化コミュニケーション」などの授業を担当しています。授業では、日本人学生と留学生が交流しながら学び合い、体験を通して理解することを心掛けています。また、学んだ知識を実生活でも活かせるように、実践的なトレーニングを取り入れ、学生同士が協力して課題に取り組めるように工夫しています。

例えば、「多文化共生論」の授業では、言葉がわからない外国で震災に遭ったらどのような状況に置かれるのかを、シミュレーションを通して学んでいます。言葉がわからないことから生じる不安な気持ちを体験し、留学生の経験を聞くことで、外国人が災害弱者にならないためのまちづくりについて考えていきます。また、「異文化コミュニケーション」の授業では、日本人学生と留学生が協力して、外国人住民に向けた新聞記事や大学紹介ポスターを作成し、日本語弱者の立場に立った「やさしい日本語」を身に付けていきます。

皆さんには、このような活動を通して価値観の異なる多くの人と出会い、多文化社会において自分を表現することのできる異文化コミュニケーション能力を身につけてほしいと考えています。そして、一人一人が自分にできることを考え、多文化共生の地域づくりに貢献できる人になっていくことを期待しています。

木暮律子研究室



岩田一成・柳田直美(2020)
『「やさしい日本語」で伝わる！公務員のための外国人対応』
学陽書房

多文化共生時代を迎え、外国の人にもわかりやすい日本語の伝え方が注目されています。この本では、そんな「やさしい日本語」を使ったコミュニケーションの心構えやテクニックについて学ぶことができます。公務員を目標している人だけでなく、外国人と日本語で交流したい人にもおすすめの本です。



担当教員の研究

卒業旅行で
他文化と出会う

私が専門にしている文化人類学とは、他文化と自文化を比較し、一般理論を導き出そうとする学問です。私が他文化を強く意識したのは卒業旅行の時です。成田空港からモスクワ経由でロンドンに到着し、ヨーロッパ各地をまわったあとで、アテネから陸路でイスタンブールに入りました。ヨーロッパでは教会や大聖堂を中心に観光し、とくにドイツの教会のゴシック様式の尖塔に心を動かされました。けれども、五感が一斉に刺激されるような高揚感を味わったのは、イスタンブールが初めてでした。異国情緒漂うモスクのある風景、定時に響きわたる礼拝への呼び掛け、雑踏さえ心地よいバザール。すべてが新鮮で好奇心をかき立てるものばかり。それがイスラーム世界だったのです。

自文化の鏡としての
他文化の研究

縁あって、フィリッドは南アジアのムスリム社会となりました。ニューデリーの大学に留学し、3年間、ムスリムの家庭に滞在しました。驚いたのは、インド人よりも私のほうがインドのことを知っているということ。当たり前ですが、私はインド研究者なのです。それなのに、現地の人々が私に質問するのは日本のことばかり。彼らにとって、私は日本代表なのです。回答で



教員の情報	
職位	教授
専門分野	文化人類学 南アジア地域研究 イスラーム地域研究
担当科目	文化人類学 宗教学 アジアの文化と観光 演習

コンタクトゾーンを
歩いてみよう

自文化と他文化が接触する場を「コンタクトゾーン」(接触領域)と捉えることがあります。コンタクトゾーンには、面白い問題が潜んでいます。人類学者(自己)が文化的な他者とのように向き合い、交渉し、記述するのとか、グローバル化が進む現代でも、自文化と他文化を分離して考えることはできるのとか、みなさんの身近なところに「自分の常識や感覚とは違う」ヒト・モノ・コトはありませんか? コンタクトゾーンを歩いて、問題を発見するセンスとスキルを磨きませんか?

自文化と他文化が接触する場を「コンタクトゾーン」(接触領域)と捉えることがあります。コンタクトゾーンには、面白い問題が潜んでいます。人類学者(自己)が文化的な他者とのように向き合い、交渉し、記述するのとか、グローバル化が進む現代でも、自文化と他文化を分離して考えることはできるのとか、みなさんの身近なところに「自分の常識や感覚とは違う」ヒト・モノ・コトはありませんか? コンタクトゾーンを歩いて、問題を発見するセンスとスキルを磨きませんか?

問題を発見するセンスとスキルを磨く!

ゼミの活動内容

本ゼミでは、個人研究が中心です。従って、研究テーマも自由です。実際、ゼミ生の研究テーマは、観光関連だけでなく、ジェンダー、セクシュアリティ、宗教とグルメ、死生観、映画、文学、メディア、サブカル、アイドルなど多様です。観光の定義からはみ出しているのでは、と感じるかもしれませんが、コンタクトゾーンとしての観光を考察するにあたって、どれも重要な切り口です。ゼミでの学びは次の通りです。まず、2年後期の基礎演習では、テキストの輪読、スピーチャプレゼン

小牧幸代
研究室



の練習、さらに簡単なフィリッドワークに挑戦します。次に、3年生の演習では、過去20年間の総決算としての「好き」気になる」をテーマとし、自分史作成にも取り組みます。その成果は進級論文として結実させます。最後に、4年生の演習では、未来を見据えて、異文化間交流・他者理解につながるテーマを選び、卒業論文を作成します。2年半の間に、研究テーマを変えることも、同じテーマを掘り下げていくことも可能です。

岡本充弘(著)(2018)

『過去と歴史:「国家」と「近代」を遠く離れて』
御茶の水書房

最新の歴史学の方法論を分かりやすく紹介した本です。文化人類学や現代思想など広く人文諸科学に言及する傍ら、歴史修正主義やポストモダン歴史学の論理も読み解いています。



担当教員の研究

第二言語習得

第二言語習得が主な研究領域で、結果構文、冠詞および語彙の習得を研究してきました。ここでは、その一つ冠詞の習得についてご紹介いたします。冠詞は日本語には存在しないため、英語教育の初期から登場するにもかかわらず、適切に使いこなすのは学習がかなり進んだ段階でも大変困難です。使うべきところで冠詞を落としてしまったり、またその逆に使うべきでないところに冠詞を入れてしまったり、不定冠詞と定冠詞の使い分けを混乱していたりなど、間違いが多く見られます。日本人学生の冠詞使用の傾向、冠詞習得を困難にしている要因を考察し、冠詞習得を促すための指導法を模索しています。

通訳翻訳教育

最近、通訳訓練の手法の一部が英語教育に応用されていますが、その中で最近注目を集めているシャドーイングの効果についても研究しています。シャドーイングというのは、人の発話を、聞きながら、ほぼ同時に、文字通りシャドー(影)のように元の発話を真似していく訓練です。もともとは同時通訳訓練の導入として、聞きながら話すという非日常的な作業に慣れさせるために行われていました。オウムのように聞こえてきたものを忠実に真似して発音するという単純そうに見える行為ですが、外国語学習におい

て様々な効果が報告されています。リスニング力向上や発音矯正など音声面だけの効果だけでなく、一部リーディング力向上や語彙力増強も指摘されています。今後は、シャドーイングはどのようなメカニズムで、どの領域にどのように実施したら最大の効果をもたらすことができるのかを探索することにも、シャドーイングの役割を英語だけでなく他の外国語学習においても比較検証したいと思っています。

関口智子研究室



教員の情報	
職位	教授
専門分野	言語学(統語論) 第二言語習得 通訳翻訳教育
担当科目	General English I・II Business English I・II・III・IV World Issues I・II

Practice makes perfect! 練習を続ければ完璧になる:習うより慣れろ!

学生に接するにあたって

私は、子どもの頃から言語に関心があり、NHKで放映されていた様々な語学のテレビ講座をよく見ていました。それぞれの言語はどんな風に関こえ、どんな文の仕組みをしているのかに大変興味がありました。そんなことから、大学では言語学を専攻しました。大学卒業後は、国際電信電話(KDDI、限KDDI)に入社し、東京国際電話局に勤務していました。しかし、留学の夢を捨てきれず、思い切って退職し、カナダとアメリカに留学しました。帰国後は、非常勤講師として関東圏内の大学で英語とフランス語を教えるかたわら、商談通訳や通訳ガイドをしていました。日本では、会議通訳、商談通訳などに資格はなく、通訳案内士(いわゆる通訳ガイド)が国土交通省管轄の唯一の国家資格です。通訳ガイドは、外国



中国、広州の学会にて

語版添乗員といった感じで、厳密な意味で通訳とは少し異なります。海外から日本を訪れる観光客に、日本の歴史や文化を英語やその他の外国語で紹介します。学生の皆さんにはプロの通訳ガイドを目指さなくとも、自分の地元や、高崎、群馬、日本について簡単に紹介できる英語力やプレゼンテーションスキルをぜひ身に付けて欲しいと思います。そして、日本についてどんどん発信し、将来、海外との懸け橋になる人材が育ってくれることを期待しています。私のゼミはありませんが、英語選択科目の「World Issues」を担当します。英語の生のニュースを素材に、語彙力とリスニング力を向上させるとともに、文法と理解力を養成していきます。英語で世界情勢を理解する知識も養っていきますので興味のある人はぜひ履修して下さい。



図書館に日本の文化、歴史、観光地などを紹介した様々な書籍、辞典、ガイドブックがあります。多くが、例えば右頁が英語、左頁が日本語のように日英両言語のバイリンガル書です。日本で何世代にもわたって受け継がれてきたしきたりの意味やルーツなどを日英語の対訳で説明しています。日本に関する知識を深めると同時に、英語力も強化できる一石二鳥の書籍です。

担当教員の研究

多様化するスポーツ

今日のわが国の政治・経済・社会状況はめまぐるしくかつ大きく変化しています。特に、人口減少と高齢化、医療費の増大、運動不足による疾病の増大などの社会状況の変化は、大きな社会問題を招いています。この影響を受け政治・行財政、経済構造など社会のさまざまな分野において従来のシステムの改革が推し進められています。

一方、20世紀以降国際的に急速に普及・発展し、とりわけ1964年のオリンピック東京大会開催を契機に創造的な文化活動の重要な柱として国民の中に広がっていったスポーツは、その存在感をさらに強めています。スポーツがこれほどに注目されている時代はこれまでなかったように思います。

また近年では、競争性を可能な限り排除し誰でも楽しむことができるようにルールが改良された軽スポーツ、ゆるスポーツや近代科学の技術革新の恩恵を受け誕生したニュー・スポーツ、超人スポーツ、eスポーツと呼ばれるスポーツが多くの人々を虜にしています。

さらに健康を意識して、ヨガや太極拳、体操やダンス、エアロビクスなどを行ったり、自然への回帰を求

めてウォーキングや・ハイキング、山登りに出かけたりなど、スポーツはこれまでになく多様化しています。

政策対象としてのスポーツ

このようなスポーツの多様化は、スポーツが健康・社会福祉、教育・社会化、経済発展等社会の広範な領域への貢献が期待されている現れであるといえます。

したがってわが国のスポーツは、文教政策の一分野としてのみ捉えるのではなく、健康福祉政策、地域づくり政策、観光政策、さらには経済政策の一貫として広く対応することが必要であるといえます。

これまで、戦後の国会においてスポーツがどのように捉えられ、議論が展開されてきたのか、またその議論がどのように政策に結実しているのかについて国会議録の分析から考察を行ってきました。

また、地方自治体におけるスポーツにも着目し、都道府県議会におけるスポーツに関する議論の分析も実施してきました。

現在は、これまで実施してきた国会や地方議会におけるスポーツに関する議論の分析をさらに進め、わが国のスポーツ政策が策定されるに至るまでの過程を明確にすることを目指しています。

「異質」なものを「受容」しよう

田中宏和研究室



教員の情報	
職位	准教授
専門分野	スポーツ政策学 スポーツ行政学
担当科目	スポーツ政策論 スポーツ科学Ⅰ・Ⅱ 初年次ゼミ 基礎演習 演習Ⅰ

伊藤亜紗、渡邊淳司、林阿希子著(2020年)
『見えないスポーツ図鑑』
晶文社



本書は、「目で見ないスポーツのわかり方」や「目に見えないスポーツの本質」について述べられている研究ドキュメンタリーとなっており、「するスポーツ」や「みるスポーツ」に新たな視点を与えてくれる書籍です。

ゼミの活動内容

スポーツは、社会の様々な分野に影響を与え、様々な分野から影響を受けながら存在しています。つまりスポーツを考えるにはそれを取り巻く現代社会について理解する必要があると思います。

そこでゼミナールでは、現代社会の諸問題に関連した書籍を読み、様々な視点から理論的に理解するのと同時に、議論を通して理解を深めていきます。

そしてそれを踏まえ私たちは、スポーツにどのようにかかわれば、スポーツの価値や意味をどのように理解すれば、様々な現代社会の諸問題を解決することができるのかについて考えていきます。

また他大学との交流や学外イベントの参加を積極的に実施し、様々な価値観や見識を身につけてほしいと思います。

このような活動を通して最終的に自分が、興味関心を持ったテーマについて卒業論文として纏めていきます。卒業論文は、学校教育の集大成となるものです。しっかりと取り組んでほしいと思っております。

ゼミナールの活動、卒業論文の執筆を通して「コミュニケーションする力」、「想像する力」、「あきらめない力」を身につけていきましょう！



担当教員の研究

エスニックマイノリティと観光

私は大学院時代からエスニックマイノリティ(少数民族)の方々との観光の関係性に興味を持ち研究を続けています。大学時代に60年代にアメリカで起こった市民権運動に関する本を読み「人種のつぼ」と言われるアメリカでの人種差別に興味を持ったことやエスニック雑誌が好きだったことなどからこの研究テーマに惹かれ、少数民族の方々が作る伝統工芸品がお土産になることの影響や「ルート観光」といって移民やその子孫たちが自分の祖国を観光者として尋ねることに関する研究を行ってきました。特にグローバリズムのなかで、少数民族の方たちの固有文化、帰属意識、民族意識がどう変わっていくのか、それに観光はどのような役割を果たすのかに興味を持っています。

外国人街の観光地化について

2011年に本学に赴任してからは、ブラジル人街(群馬)や韓国街(大阪)を例として、外国人街の観光地化に関する住民の意識を研究しています。地域政策の観点から観光地化をとらえ、観光地化がどのように日本人住民と外国人住民の間の相互理解・雇用促進、外国人のエンパワメントといった地域課題を解決することに役立つかを調べてきました。研究を通して、同じ地域の中でも観光地化に関する考えは社会的立場によって大きく違

うことが明らかになりました。「地域住民」を考えると、それが一つのグループではなく様々な考えを持った人たちの集合体であることを理解する必要があると思っています。

コロナ禍と観光

最近では、コロナ禍における観光の在り方にも興味を持っています。コロナ禍において観光をする人と控える人の両方がいますが、それぞれの理由や理由による長期的な旅行行動への影響の差等を調査しています。例えば、過去の研究では、禁煙者や肉食主義者の中でも、健康への影響を考慮してその行動をとっている人と、モラルを求めている人に分かれることが分かっています。それらに基づいて、コロナ禍で変わった人々の観光行動の根本的な理由とその影響を探っています。



観光を「社会を映す鏡」として考えてみよう!

ゼミの活動内容

丸山ゼミでは、観光と文化、そしてそれにまつわる観光政策について学びます。ある地域の文化を観光化するときに、どのようなプロセスを経ているのか、そのプロセスと政策はどのようにかわっているのか、観光は地元住民や文化へどのような影響を与えるのか、そしてどのように観光化したいかを決める権利をもつのは誰なのか、誰が利益を得るのかといったことを考えていきます。また、観光が与える影響というのは、地元社会だけに限りません。文化観光は、どのように観光者

にどのような影響を与えるのでしょうか。本ゼミでは、「観光」という人が楽しむために「行動が地域に与える影響を分析することによって、地域づくりのなかで観光をどのように生かしていくかを考える能力をつけることを目標にしています。また、ディスカッション、プレゼンテーション、グループ研究などそれぞれが課題に主体的に取り組むことを目標としています。



丸山奈穂研究室

教員の情報

職位 教授

専門分野 観光学、地域住民と観光、エスニックマイノリティと観光

担当科目 国際観光論、観光プロモーション論、観光文化政策論、演習

有川浩(2011)

『県庁おもてなし課』

角川文庫

専門書ではなく映画化もされた小説ですが、地域に観光客を呼ぶプロセスやそれにかかわる公務員、民間業者、地域内外の人達の考えなどがとても分りやすく書かれています。専門書に入る前に読んでみるのにとってもいい本だと思います。



担当教員の研究

2つの「シユウカツ」

人生の中で重要な行動は、人によってさまざまかもしれませんが。保護者から経済的に自立するために「就活(就職活動)」は、人生の前半で重要な行動のひとつであると思います。また、2010年代から広がり始めた、自分らしい人生の終わり方を考え、実践する活動いわゆる「終活」は、人生の後半での大切な行動のひとつになりつつあります。

しかし、だれもが満足できる2つの「シユウカツ」を行えるわけではありません。不登校やひきこもりになった若者は、そもそも普通の就活ができません。そこで、行政や民間非営利団体(NPO法人など)が社会復帰と就職の支援を行うことがあります。また、身寄りがなく生活に困窮している人は、終活を十分に行うことができません。このような場合、葬式やお墓についての本人の希望がだれにも伝わらず、故人の遺志が無視されます。一部の地方自治体では、民間団体と協力しながら、この問題に取り組み始めています。この2つ「シユウカツ」で民間団体と行政に何ができるのか、どんな協力関係が望ましいか、といったことを研究しています。

人とのつながりを大切にした経済活動は成り立つ?

もうひとつの研究テーマは、より大きなものです。現在、わたしたち



はグローバルな市場経済の中で生活しています。厳しい競争を勝ち抜き、自己責任で生きていく、そういった生き方が求められています。とはいえ、他人を尊重し、つながりを保った経済活動を行うことは本来に不可能なのか。疑問が浮かびます。

答えは簡単にはできません。ただ、21世紀に入ってから、社会貢献活動とビジネスの両立を強調する「社会的企業」という組織が登場しました。簡単に言えば、上述の民間非営利団体、あるいは協同組合といった既存の団体が、リニューアルしたものです。彼らによる経済活動や運動の総称を、「社会的連帯経済」と呼んだりもします。この経済のかたちにどんな可能性があるのか、また限界はどこにあるのか。そのような点に関心を寄せて研究をしています。

目的を持って学生生活を過ごしてください。

ゼミの活動内容

ゼミでは、まず社会的企業(国内ではソーシャルビジネスの事業者ともいえます)の基礎知識を習得するため、テキストを輪読します。同時に、これらに該当する団体たとえばNPO法人も実際に訪問して調査を行います。2・3年次はこのような地道な作業を通じて卒業論文のテーマを決め、4年次には論文作成に取り組むこととなります。普段のゼミでは、各自あるいはグループで報告を行います。しかし、勉強だけでは息が詰まりますから、夏合宿やコンパもします。そのほか、高崎市にある榛名神社の社家町地区で地域活性化のボランティア活動も行っています。お土産物の開発、神社のボランティアガイドなど、地元の方と協力しながら活動しています。

楽しく、でも適度に厳しく勉強するのがこのゼミのモットーです。2年半のゼミはあつという間です。充実したものになるよう主体的に動いてください。

八木橋慶一研究室



カール・ポラニー(1944-2009)(野口建彦・栖原学訳)

『[新訳]大転換—市場社会の形成と崩壊—』

東洋経済新報社

わたしたちが当たり前と思っている市場経済について、その成り立ちや社会に与えた影響、問題点を古典から学んでみてください。



教員の情報

職位 教授
 専門分野 社会的企業論、ローカル・ガバナンス論
 担当科目 社会起業論、NPO論
 コミュニティビジネス論
 演習

担当教員の研究

観光史から、地域社会の
人々の「思い」を考える



教員の情報

職位
准教授
専門分野
中東地域研究
観光史
観光人類学
担当科目
演習

人生哲学としての
ツーリズム・リテラシー

観光地や観光活動のなかで展開される文化や伝統は、一見すると過去から形を変えずに綿々と受け継がれてきたものとして、本質的に捉えがちです。そして、観光の現場でも同様に、文化や伝統の持つ歴史的古さや普遍性といった「ルーツ」(起源)を強調し、地域の独自性や固有性を美徳として語っていきます。しかし、観光史を調べていくと、一連の文化や伝統が実は、観光という「舞台」のなかで選び取られたひとつの「台本」でしかないことに気づくはず。むしろ、文化や伝統をめぐるゲスト(観光者)、ホスト(観光地)、プロデューサー(観光産業)の間での相互交渉によって蓄積されてきた「ルーツ」(歴史)と、その後存在する、人びとや社会の多くの「思い」が存在することを知らなくてはなりません。

研究を進めていくと、観光とは決して「時的な非日常」ではなく、私たちの日常生活や人生とコインの表裏のように、密接に関わりを持つ実践であることに気づかされます。そのなかでも、口頭や文字、写真で「観光経験を語る」という行為が、時代や地域固有の社会的文脈を生み出す実践であることを、「よりよい観光を実践するための技法や思考」としての「ツーリズム・リテラシー」の概念を絡ませながら明らかにしようとしています。特に、19世紀から20世紀にかけて中東諸国を旅した旅行者たちの旅行記を分析しながら、その歴史の変遷を追っています。その他にも、フィールドワークがデジタル空間にも拡張するなかで、SNS(ソーシャル・ネットワークキング・サービス)の分析を通じて、観光地や旅行経験を語り、繋がる人びとの姿を明らかにしています。

以上のように、観光史を分析することは、過去を解明するだけでなく、現代社会における豊かな観光文化としての「ツーリズム・リテラシー」を創造する原動力ともなるはず。観光の持つこの無限の可能性に惹きつけられ、私は今日も研究を続けているのかもしれない。

世の中は常にわからないことだらけです。

ゼミの活動内容

「観光史から地域・社会のツーリズム・リテラシーを読み解く」というテーマでゼミナールを運営しています。私たちが経験する観光体験は、地域・社会のなかに埋め込まれた観光実践のイメージ群を反映して常に生成され続けています。地域・社会の観光史を学ぶなかで、個人や社会の「よりよい観光の実践するための技法や思考」としての「ツーリズム・リテラシー」の内実もまた、明らかにすることでしょう。

ゼミでは、国内外の観光地・観光現象を対象に、旅行記やガイドブック、旅行雑誌、ポスター、写真をはじめとするさまざまな過去の観光資料を収集し、分析していきます。その過程で、個人やグループでのフィールドワークを通じた関係者へのインタビューや参与観察、各地の図書館での文献資料収集を行っていきます。この一連の観光史研究の経験の数々が、皆さん自身のツーリズム・リテラシーを蓄積する足掛かりとなるはず。そして、研究の過程で出会い、交流する土地やヒトとの相互交渉の経験の数々が、実は観光史研究における最大の魅力であることに、気付くのではないのでしょうか。



書棚から
この一冊

ジョン・アーリ&ヨナス・ラースン
(2014)『観光のまなざし 増補改訂版』
加太宏邦訳、法政大学出版局

観光に関するさまざまな議論やアイデアが詰まっている一冊で、大学院時代から何度も何度も読み返しています。読み返す度に、今まで考えもしなかった新しい発見があったりします。おそらく今後も、時を経て何度も読み返すことになるのでしょう。